



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	拠点的な場所と＜あるじ＞の役割に関する研究：国内のゲストハウスを事例として〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	石川, 美澄
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第13981号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78338
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Misumi_Ishikawa_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：石川美澄

学位論文題名

拠点的な場所と〈あるじ〉の役割に関する研究 —国内のゲストハウスを事例として—

本研究の目的は、人と人、人と社会の接点が生まれるような拠点となる場所（以下、拠点的な場所とする）の意義と、その場所を代表し、日々その場所の適切な運営を行う者（以下、〈あるじ〉とする）の役割を明らかにすることである。本研究では、これらを実証的に明らかにしていくために、拠点的な場所としてゲストハウスを取り上げた。また、ゲストハウスを立ち上げ、あるいは前任者からそれを引き継ぎ、日々その場所を運営する個人を〈あるじ〉とし、彼・彼女らの開業動機やゲストハウス運営に対する取り組みについて分析を行った。さらに、ゲストハウスを利用する宿泊者と近隣住民が見出すゲストハウスの意義ならびに〈あるじ〉の役割についても考察した。

本研究の第1章では、本研究の目的や社会的・学術的背景、研究方法、用語の定義等について述べ、第2章では都市論・まちづくり・観光研究等の領域における先行研究に対して、次の5つの視点からレビューを行った。すなわち、第1に拠点的な場所とその重要性、第2に場所の〈あるじ〉の役割・意義、第3に宿が拠点的な場所になりうるという指摘と宿の役割、第4に観光研究におけるホストとゲストの関係、第5に国内のゲストハウスを事例とした研究の整理である。

第3章と第4章では、2012年と2017年に実施した質問紙調査の結果に対して、量的・質的な分析を行った。第3章では、量的データを基に、国内のゲストハウスの特徴と5年間の経年変化について明らかにした。ここでは、先行研究においてゲストハウスの特徴とされてきた「相部屋がある」や「素泊まりである」、「個人経営である」という点が徐々に変化していることを明らかにした。これらの変化を踏まえた上で、ゲストハウスの定義や特徴等の再検討が必要であると指摘した。また、このような変化の背景には、インバウンドの急増や空き家問題等の関連があることを示唆した。第4章では、質的データ分析の手法であるSCATを用いながら、ゲストハウスの開業動機・理由について分析を行った。分析の結果、ゲストハウスの新規開業の背景には、回答者らの個々の旅行経験やゲストハウスとの接触、近年のインバウンド増加に伴う宿泊ニーズの高まり、自身の追究したい暮らし・働き方を実現するためなど、様々な背景や動機があることを指摘した。また、回答者らにとって、ゲストハウスは、様々な人とのコミュニケーションの場として機能することや拠点づくり・場づくりを実現するために適していると受け止められていることも明らかになった。さらに、ゲストハウスという宿を新規に立ち上げることで、国内の宿泊環境に対する不満を解消したり、空き家等を利用した不動産マネジメント手法の一つとして機能したりすると捉えられていることも確認された。

第5章では、1990年代後半から2012年頃までに開業したゲストハウスの〈あるじ〉に対するヒアリング調査を基に、国内のゲストハウスの展開を整理し、当時のゲストハウスの役割を明らかにした。すなわち、ゲストハウスは、移住希望者や長期滞在者向けの宿として旅行者を

中心に利用されていた場所から、近隣住民が行き交うような場所へと変容しつつあることを指摘した。

また、ゲストハウスの〈あるじ〉の役割についても明らかにした。すなわち、〈あるじ〉は、ゲストハウスという事業経営を通して、①当該地域における健全な宿泊業の経営を行うこと、②旅行者を含む多様な人びとが居合わせたり交流したりする場所の運営を行うことという2つの役割を担っていることを確認した。今回の調査結果では、①の役割はヒアリング調査協力者全員がその役割を担っているという意識は確認されたが、②の役割については、それを担う〈あるじ〉と積極的には担っていない〈あるじ〉の両方が併存していることが明らかになった。

第6章では、ゲストハウスの宿泊者と近隣住民に対するヒアリング調査の結果とHゲストハウスでの参与観察を基に、彼・彼女らが見出すゲストハウスの意義や〈あるじ〉の役割について考察した。まず、宿泊者と近隣住民に対するヒアリング調査の結果、以下の2点が明らかになった。すなわち、第1に、宿泊者にとってのゲストハウスは、「比較的安価な料金で宿泊場所を提供する施設」と「多様な人びととの出会いや交流の機会が得られる可能性がある場所」という2つの機能ないし役割を担っていると認識されている点である。第2に、ゲストハウスは、近隣住民同士の新たな接点がつくられるような場所として機能しているという点である。

次に、参与観察の結果から、ゲストハウスは宿泊者や近隣住民が集い、様々なコミュニケーションを展開する場所であることを確認したが、〈あるじ〉1人ではこれらの場所を維持・管理することは困難であると指摘した。その上で、その場にいる人びとが楽しむためには、〈あるじ〉以外の人びとも〈あるじ〉的な役割を担っている可能性があるとして唆した。

第7章では、本研究で明らかになった結果を基に、総合的な考察を行った。そして、拠点的な場所の意義と〈あるじ〉の役割について明らかになったことを3点にまとめた。すなわち、第1に、宿が拠点的な場所の1つとなるためには、「不動 (immobile) 性」、「小規模性」、「個人による場所の立ち上げと〈あるじ〉の存在」、「旅行者を含む多様な人びとがアクセスできる環境」の4つの要件を満たす必要がある。しかし本研究では、この4要件を満たしたとしても、宿のキャパシティの問題や〈あるじ〉の個性、宿の運営に対する意識・姿勢等によって、万人に開かれた拠点的な場所として機能するとは限らないという点を指摘した。第2に、宿が拠点的な場所として位置づけられることで、一時的な滞在者である旅行者を含む様々な人びとが行き交う場所の選択肢が広がり、人と人、人と社会の接点がより多層的になる可能性がある。第3に、拠点的な場所を適切に管理運営するためには、〈あるじ〉の存在は欠かせない。なぜなら、〈あるじ〉はその場所を代表する者という役割を担っていると同時に、拠点的な場所に居合わせた者同士の接点をつくりだすような役割も担っているからである。一方で、〈あるじ〉的な振る舞いをする宿泊者や近隣住民の姿も確認され、〈あるじ〉1人がその場所の指揮権を握っているとは言えないという点も明らかになった。

本研究では、拠点的な場所の1つとしてゲストハウスを取り上げ、質問紙調査やヒアリング調査ならびに参与観察を通じて、拠点的な場所の意義と〈あるじ〉の役割について検討した。本研究で提示した結果や結論は、都市計画やまちづくり、観光まちづくりの研究領域において一定の貢献を果たしたと考えられる。

しかしながら、本研究は一部のゲストハウスやその〈あるじ〉、宿泊者・近隣住民を対象とした現地調査を通じて得た結論であるため、ここで提示された視点や明らかにされた点を一般化するには限界がある。また、本研究では小規模なゲストハウスを事例としたが、今後は比較的規模の大きな宿を対象とした調査・研究も必要である。さらに、ゲストハウスの〈あるじ〉のライフステージの変化やゲストハウスの閉館・代替わりといった時間的な経過を踏まえながら、彼・彼女らの運営等に関する意識・実践の移り変わりについても考察する必要がある。